

「相続財産を我々のものにしよう」

(マタイによる福音書21:3-43)

今日の福音の主イエスの対話相手は、先週の福音に続いて祭司長や長老たちです。主イエスの死と復活を目の当たりにした人々が今日の福音のたとえを聞けば、すぐに農夫に殺された「息子」に、主イエスを連想したことでしょう。

「一人を袋だたきにし、一人を殺し、一人を石で打ち殺した」とあるように、農夫たちの残忍さはエスカレートしていきます。そしてついには、「相続財産を我々のものにしよう」と意図的な反抗となり、主人の期待は無残にも裏切られてしまいます。はじめはちょっとした出来心が、段々と心が麻痺してしまうのが人間なのだと思います。人は不安や恐れから逃れるために、人から奪ってでも、安心を得ようとし、そして、はじめは「少しならば」と、他者よりも多くを得ようとし、それが気がつけば、「まだ足りない、まだ足りない」と、大きく奪う。そうしてわたしたちの世界はまさに「奪い合う」世界になってしまっています。しかし、他者を顧みず、神から離れたところで得たものによって保証される幸いなどありえません。自らの幸いや安心だけを求めるなら、人は離れていき、愛に飢え、孤独の苦しみに至ることでしょう。だから、礼拝で毎回わたしたちは唱えるのです。

「すべてのものは主の賜物。わたしたちは主から受けて主に捧げたのです。」他者の命も、自分の命も神さまのもの。だから大事にできます。日々いただく糧も、神さまからの賜物。それを持ち寄ることこそ、より良い実りがもたらされます。だから、奪い合うことはむしろ貧しさに向かっていることに他ならないのです。教会も神さまのものです。教会を自分たちのものと勘違いしたら、それはもう教会ではなくなってしまいます。わたしたちはここから追い出されてしまうでしょう。それにしても、「自分のものにしたい」という人間の思いは強力です。どんなに礼拝で唱えても、もちろんそれは無意味ではないけれども、しかし、教会を一步出れば、それを忘れた世界でわたしたちは生きています。

主イエスはそういうわたしたちのために十字架にかかってくださいました。「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。」とあります。これは、祭司長や長老たち、そしてわたしたちの欲望の末に殺された主イエスこそが、隅の親石となり、まことの救い主となる、ということです。わたしたちもまた、祭司長、長老たちと変わらず、自らの悪さには気が付かないものです。そんなわたしたちのために主イエスは十字架にかかってくださいました。十字架上の主イエスの姿を見つめましょう。最も尊い方が、十字架の上で両腕を開いて、すべてを手放して死んでくださいました。あのお姿こそが、わたしたちの奢りや傲慢さ、他人から奪ってでも「自分のものにしたい」思いを打ち砕き、謙遜さをもたらしてくださいます。奪い合うのではなく、手を開き、与え合うところにこそ、神の国が開かれていることを知らされます。だからこそ、あ的主イエスこそが教会にとっては、建物にとって最も大切な親石となる石なのです。

十字架を見つめ、「すべてのものは主の賜物」であることに立ち帰り、奪い合うのではなく、分かち合う、与え合う生き方へと変えられましょう。そして、奪い合う世界へと派遣されるために、神はわたしたちを教会に集めています。

※「彼の相続財産を我々のものにしよう」

当時の決まりでは、相続人のいない財産は、最初にそれを占有した者の財産となりました。農夫たちは不在である地主の息子が来たのを見て、地主が既に死んだのだと思ったのかもしれませんが。そうであれば、跡取りさえ殺せば、財産は自分たちのものになるからです。

※「隅の親石」

「隅の親石」と訳された句は、「隅の頭」となります。「頭」は「頂」とも「端」ともとることができます。「頂」を意味するとすれば、建築の仕上げとして玄関正面上部に埋め込まれる「仕上げ石・要石」を指します。また、「端」の意味であれば、建築のはじめに建物の一番外側の角に置く「礎石」を意味します。いずれにせよ、最も大事な石を表していることとなります。主イエスは人からは役に立たない石として投げ捨てられましたが、神によって「隅の親石」にされました。主イエスを信じない人々にとって、主イエスは「つまづきの石」になります。しかし、新しい「建物」である教会には「隅の親石」となるのです。